



日記「少数意見」

— 8 人物編 —

JUN

2002年1月25日(金) 山咲千里さんのこと

彼女と会ったのは確か1985年のことで、その当時私は映画「乱」の仕事でよく黒澤明監督のショーファー付きの車で移動していた。よく覚えていないが、多分車の中でそのショーファーと二人だけになったときだと思う、彼が「山咲千里という女優が黒澤プロに移籍してきたが、前に所属していたプロダクションともめているので相談に乗ってくれないか」と言った。彼女は、NHKの朝の連続テレビ小説「鮎のうた」の主人公を演じて評判になった新人女優だとのこと。私は芸能界にはうとく、彼女の名前すら知らなかったが、引き受けることにした。

ほどなく彼女の母親から電話があり、事務所で会い、簡単な契約書を作り仕事は終わった。もめているというほどの問題があったわけではなかった。無事契約が調印された後、千里さんの母親が、お礼に娘と食事をしませんか、と言った。こんな申し出は初めてだったのでビックリしたが、喜んでお受けした。

場所は六本木のステーキハウスで、母親は千里さんを紹介すると消えてしまった。用意されたコーナーはすだれを下ろすと個室のようになってしまうスペースで、芸能人はこういうところで食事をするのかと感心した。私は、若く美しい女優と二人で食事をするという、めったにない経験をするようになった。

私は当時38才、結婚5年目の貧乏弁護士で、デパートのバーゲンで買ったスーツがみすぼらしかったので、華やかな千里さんを前に気後れしていた。千里さんは当時22, 3才、慶應大学経済学部の学生だった。知性と美貌を併せ持った女優で、今で言うと菊川怜か。

千里さんは、自分の名前（本名は山崎千里）の由来などの話をしていたが、私は上がっていたのでほとんど覚えていない。恋人がいるという話になり、彼女は「毎日電話しているんですよ」と言っていた。ちょっと残念に思った。

食事が終わって千里さんは、電話番号を教えてくれる、と言った。ひとつの番号を言った後に、最近自分の部屋に電話をひいたと言い、もうひとつの番号を教えてくれた。「前の番号は居間の電話なので母が出ることが多いのですが、こちらにかけてくれれば私が直接出ます。」

私は今でもこの二つの番号を書いたアドレス帳を持っている。でも、結局一回も電話しなかった。今から思うとなぜかけなかったのかと悔やまれるが、その当時は用もないのに電話をする勇氣はなかった。

黄色く変色したアドレス帳の山崎という名前の横に書かれた二つの電話番号を見ながら、彼女はなぜ二番目の電話番号を覚えてくれたのだろうと考えるが、わからない。

2002年7月10日(水) 三島由起夫会見記補遺

いくつか書き落としたことがあるので。元の会見記はエッセイの中にあります。

三島のアタッシュケースの中に薬があったと書いたが、ビタミン剤などのビンがごろごろ入っていた。三島は、外人の友達がこれを見て、It's killing you と言っていたと笑った。

途中で電話がかかってきたが、三島は家の外で電話を取った。軒下に電話が置いてあったようだ。その電話は三島が酷評した作家からのもののように、三島は、「そういう意味ではなくて・・・」と盛んに言い訳をしていた。

会見は終わり方が唐突だった。三島は突然立ち上がり、家の方へ足早に歩いていった。私と町永はビックリして御礼を言おうと立ち上がったが、三島はほとんどそれを聞かずに立ち去った。なにか失礼なことをしたのか、と悩んだが、しばらくして同じような光景をテレビで見た。それは三島がある著名な指揮者と一緒にオーケストラを指揮するという番組だった。指揮を終えた三島が戻ってきてそれを指揮者が拍手で迎えた。しかし、立ち上がって握手をしようとする指揮者を無視して三島は椅子に腰掛けた。指揮者は当惑していた。その指揮者は大柄で少なくとも私くらいの身長—175cm—はあったろう。三島がそこで立って握手したら160cm弱の三島との身長差は歴然であった。石原慎太郎と自宅のバルコニーで撮った写真なども、身長を隠すために白いスーツを汚してまで手すりにもたれてポーズをとったとどこかに書いてあった。あの時もそういうことだったのだなと今では思う。

2002年8月21日(水) 宮沢りえ

昨日南麻布のアップピアで食事をしたが、隣のテーブルに宮沢りえがいた。今製作中の作品の監督、スタッフと一緒にようで、楽しそうに話していた。表情はとても明るかったが、体重は戻っていないようで痛々しかった。あの時の傷は大きかったのだろう。

2002年8月23日(金) 料理屋で会った有名人

先日の宮沢りえの他こんな人たちを見かけた。

エノテカ・ピンキオーリ（イタリアン）で小泉純一郎、トゥール・ダルジャン（フレンチ）で中村紘子と庄司薫、プント・プンティ（イタリアン）で浅野温子、エル・トゥーラ（イタリアン）で鹿賀丈史、纏（鮎）で金子信夫、酉友（焼き鳥）で舞の海。こう並べると皆さんイメージに合ったところでお会いしてますね（笑）。

2002年8月26日(月) すれ違った有名人

私の履歴書、エッセイなどで既出の人と映画会社のパーティーでみた人は除く。

先ずスポーツ関係から。

ジャイアント馬場。キャピトル東急ホテルのロビーでみた。デカカッタ。

もっとデカカッタのは、岡山恭崇。バスケットの選手で230センチ。虎ノ門の交差点の反対側にいたが、2、3メートル離れて人垣が出来ていて、みんな口をあけて見上げていた。

ジョージ・フォアマン。最強だったころのフォアマンで、アリの倒したジョー・フレイジャーを2回でKOし世界ヘビー級の王座についた後だった。彼は日本武道館で行われるタイトルマッチのために水道橋のボクシングジムで調整していた。私はちょうどその時同じビルにある空手道場に通っていた。前蹴りの稽古の最中ドアから大きな黒い顔がのぞいた。新聞で見たフォアマンだった。彼はしばらく興味深そうに稽古をながめていた。次の年、フォアマンは有名なキンシャサの戦いでアリの敗れた。

2002年8月27日(火) 続・すれ違った有名人

吉永小百合。早稲田の第二文学部にいたころ文学部の方から坂を降りてくる彼女とすれ違った。友人の中には、図書館で目の前に座られたので本が読めなかったと言っていた者もいた。あのころの小百合は広末の何倍も人気があったと思うが、誰も追いかけて学生である彼女を尊重していたと思う。まだ日本に慎みやけじめが残っていた時代だった。

岩下志麻。「乱」の仕事をしていたころ、製作会社であるヘラルド・エースが並行して「瀬戸内少年野球団」を作っていた。その完成試写会に呼ばれたが、劇場の席がちょうど岩下さんの真後ろになった。彼女は座席に深く腰掛け長い髪を椅子の後ろにたらしめた。彼女の髪が私の手にかかり、ちょっとアブナイ気持ちになった。

石原慎太郎。国会議員だったころ、私の事務所が入っているビルの前の道ですれ違った。一瞬彼は私の顔を見つめて、どこかで会ったかな、というような目をしたが通り過ぎた。石原さんとは会ったことはないが、1975年の都知事選のとき街宣車の上にいるのを見たことがある。石原が美濃部に負けた選挙だったが、投票日の前日各党の候補者が新宿駅西口に集まった。石原の車には三木武夫総理、中曽根幹事長と応援にきた石原裕次郎が乗っていた。三木は石原が嫌いだったが立场上応援せざるを得ない。三木は応援演説のなかで何回も「石原裕次郎君」と言った。ボケを装った三木一流の抵抗だったのだろう。三木の後ろで慎太郎と裕次郎が顔を見合わせて苦笑していたのが印象的だった。

2003年10月11日(土) シュワちゃんの野望

シュワちゃんとは同じ1947年の生まれで私のほうが2ヶ月弱年上だ。だから彼の略歴を見ると同じ年齢の私が同じ年に何をしていたか思い出す。

それはさておき、シュワちゃんほど成功したスターがなぜ政治家を志すのか考えてみよう。

政治家とスターは似ていなくもない。シュワちゃんの演説している姿は映画の一場面のようにもある。もっとも彼は政治家の役を演じたことはなかったと思うが。

アドルフ・ヒットラーやフィデル・カストロは何時間も休まずに演説をしたという。その記録フィルムを見ると自分の演技に酔っているかのようなパフォーマンスが印象的だ。

ヒットラーの演説というと、チャップリンの「独裁者」を思い出すが、白黒の画面で見るとどちらが記録映画か判然としなくなってくる。二人とも自分の言葉とパフォーマンスによって人の心を動かそうとし、その意味ではチャップリンも政治家だった。

そもそもスター（とまではいかない役者も）は観客を必要とし、自らの演技で観客の心を捉えようとする。それは政治家が権力で人を動かすのに似ているが、スターの力には限界がある。権力が、人が自ら欲しないことを強制する力だとすると、スターの力は権力ではない。

多くのスターはそれで満足し、虚像として人の夢を支配することをもって足るとする。しかし、何人かのスターはそれでは満足せず、素の自分として人を動かしたいと思う。

スターは現代の偶像であり、大衆に影響を与える。でもスターは作られた偶像でありそれをスター自ら知っている。だから頭のあるスターは演出家という役者を動かす仕事に就きたいと思う。それほど頭の良くないスターは政治家というそれほど頭脳を必要としない仕事に魅力を感じる。

政治家志望のスターの考えていることは概ねこんなものだと思うが、なかにはもっと大きな野望を抱くスターがいる。それは、自らを演出家兼主演とし、世界を舞台に芝居をしようと思う者である。

普通の芝居では、役者は決められた舞台の上で決められた役を演じる。政治家になったスターはこれとは異なり、自らの役を決め、場合によっては舞台を自分で作ることも出来る。戦争という舞台で自分が一番輝くのであれば、その舞台を作り出すことも不可能ではない。

シュワちゃんは米国生まれではないので、大統領にはなれない。だから「ターミネーター」の世界が出現することは多分ないと思うが。

2005年4月16日(土) 三島由紀夫とテロルの倫理

「三島由紀夫とテロルの倫理」という本を読んだ。千種キムラ・スティーブンというニュージーランドで大学教授をしている人が書いた本でたまたま大盛堂で見つけた。多分ほとんど売れていない本だろう。

一応全部読んだから面白くないとは言わないが、不満は残る。三島を真面目にテロリストとして評価して日本の原理主義者と見るところは同意するが、せっかく自爆テロとの類似をあげ、赤軍が三島に影響されていたというのだから、三島ー赤軍ーイスラムの自爆テロの流れを究明して欲しかった（2002年4月16日「自爆テロと三島由紀夫」参照）。

三島のことでまだ書いていなかったことがある。三島と会ったあと礼状を出してそこに「美しく死んでください」と書いたことは「三島由紀夫会見記」に書いたがその後日談。町永と三島から返事がくるのではないかと待っていたがそれは当然ながらこなかった。祖父が平岡梓氏と会って話したとき三島の二人についての印象が伝えられた。私については「好青年」とのことであらう。町永については「あれはただの文学青年だよ」とのこと。町永については三派系全学連との触れ込みだったので、それに対する反応としては別に否定的な評価というわけでもな

いだろう。しかし、私は町永には言えなかった。町永は私とは違って熱狂的な三島ファンだった。

それからしばらくして、私は三島の楯の会に入ろうと思った。自分でそう思ったのか、祖父に勧められたのか、多分後者だったのだろう。自分でももっと男らしくならなければいけないと思っていたのは確かであるが。

祖父が、私が楯の会に入りたいがっていると平岡氏に伝え、それを平岡氏が三島に伝えた。ところが、三島は平岡氏をしかりつけたとのこと。今から考えると、命がけの行動に知り合いの孫を参加させるはずもなく、当然の反応だった。私や、祖父や、多分平岡氏もそんな認識はなく、楯の会をボーイスカウトの変種と考えていたのだ。その後、この事件のせいかわかれないが、祖父と平岡氏は疎遠になってしまった。

ついでに、なぜ三島が会ってくれたかという、三島は祖父に義理があったのだ。それは、多分三島が「絹と明察」を書いていた時の話だと思うが、重役室というものを見たいと平岡氏を通じて当時ある会社の重役をしていた祖父に依頼があったとのこと。そんなことがなければあの時期に無名の大学生（それも三派系全学連を連れてくるという）に三島が会うわけがない。

最後に三島との話を思い出してみると、とても内容が高度だったと思う。その時は作家は普通このような話し方をするのか、としか思わなかったが。例えば、大江健三郎について「文学部を、それもフランス文学を出たので、彼の小説には社会科学による基礎がないと言った」と書いたが、三島はその前に「大江は渡辺一夫の弟子でしょう」という趣旨のことを言った。私は渡辺一夫が何者か知らなかったで、前のような話になった。渡辺一夫が有名なフランス中世文学の研究家で大江が彼に憧れて東大のフランス文学に行ったことを知っていればもっと面白い話が聞けたのだろう。事ほど左様に三島の話はレベルが高く、大学生だった頃の自分を基準に話しているかのようなようだった。

2005年4月22日(金) 三島由紀夫会見記補遺その2

なぜか「三島由紀夫会見記」に書かなかった面白い話がある。30年以上前のことなのであまり正確ではないかもしれないが。

一つは、何からそういう話になったのか覚えていないが、創価学会の話になり、三島は「これからはミスティックなものが関心を集める時代になる」と言った。「ミスティック」という言葉が耳に残っている。創価学会の将来についての三島の予言が当たったかどうか分からないが、オウム真理教事件は三島の勘が鋭かったことを証明している。

もう一つは、多分SFの話をしていたときだったと思うが、私が「永遠と絶対を対象に出来るのはSFだけではないか」と言い、勉強している法律について、法律は永遠とも絶対とも関係がないからつまらない、という趣旨のことを言った。三島は一瞬考えて、「法律は相対的な絶対ではある」と言った。不変ではないが、その時代においては絶対的な力を持っているということだと思った。三島としては、法学部の学生の勉強意欲を削ぐようなことを言わないほうがいいと思ったのだろう。三島のコメントはそれほど意味があるものではないが、私の記憶に残っているのは、この発言の前に一瞬、多分10分の1秒ほど、の間があったことだ。三島の話にはいささかの淀みもなく、まるで決められたセリフのように言葉が出てくる。どんな頭にもいい人間でも、考えるというプロセスがあってそれが相手にも分かるものだが、三島の場合は人間には感知できない速度の思考が行われているようだった。だから、一瞬の間が、三島が人間であることを感じさせてくれたという意味でとても印象に残っている。

「私の履歴書」に書いた三島夫人、瑤子さんの仕事をしていたとき、プロデューサーの藤井浩明さんが瑤子さんに「三島さんにあるとき映画の批評をお願いしたんですよ。原稿用紙4枚ということで。三島さんはすぐペンをとって原稿用紙にさらさらと書き始めた。一気に書き上げて丸を打ったらそれが4枚目の原稿用紙の最後のマスだったんですよ。それも完璧な出来で」と話した。瑤子さんは「プロなんだからそのぐらい当たり前でしょう」と言っていたが、そうでもないだろう。いろんな人に会ったが、あんな人間は見たことがない。いや、本当に人間だったのか。

2005年9月14日(水) 小泉純一郎と三島由紀夫

この二人は関係ないように見えるが、そうでもないような気がする。

三島事件が起きたのは、小泉が27才ぐらいの時で、少なからず彼のその後の人生に影響を与えたのではないかと思う。三島事件は我々の前の世代にとっての終戦に等しい衝撃を我々の世代に与えた。小泉は侠客のDNAを持っていると言われているので、普通の若者より衝撃は強かったろう。

三島思想を一言でいえば、大義のために死ぬことで、もっと短くいえば、「献身」になる。この言葉は三島と石原慎太郎の対談の中で、両者が期せずして一番好きな言葉として挙げていた。

行動家としての三島の思想は決して複雑なものではなく、文学者としての三島とは完全に切り離してみるべきである。三島は、護るべきものは何かと問われて、3種の神器と答え、それは具体

的には、賢所、神殿、皇霊殿からなる宮中三殿であると言った。天皇でも天皇制でもないのだ。これは三島一流のレトリックで、「護るべきものは何であれ、あればいい」と言っているがごとくである。護るものより護る行為に価値があるというのが、三島の行動の美学である。

そこで、小泉にとっての郵政民営化について考えてみよう。これは、小泉にとって30年来の主張であり、それに命をかけているという言葉に偽りはないだろう。では、国民にとって郵政民営化が何かというと、世論調査でもそれは最後まで国民の関心事の上位にはこなかった。それにもかかわらず、国民は郵政民営化のみを訴えた小泉を熱烈に支持した。なぜか。それは、小泉の「献身」に共感したからに他ならない。郵政民営化がどれほどの価値があるか分からないが、それを30年に渡って訴えてきて、殺されてもそれをやり遂げるといふ男を国民は「本物」だと評価したのだ。懸ける対象ではなく、懸ける行為が賞賛に値するのだ。国民はその姿に「感動した」のである。

三島が35年前に身をもって示した、大義の為に命を懸けるという行為を小泉は重大局面で試み、それが多くの人々の琴線に触れたのだ。多分これは、間欠泉のように何十年に一度吹き上げる熱い水柱のような日本精神の発現なのだ。

2006年1月30日(月) 堀江報道

最近の堀江報道を見ていると不愉快になる。

例えば、民主党の岡田前代表との話し合いの際、堀江が「国民はバカだ」との発言を繰り返し、それを聞いた岡田は、このような人を民主党の候補者には出来ないと思ったとのこと。マスコミは岡田の判断を賞賛する。(そもそも、候補者選考の際のやりとりを公表するのは守秘義務違反だろう。それも、堀江が反論出来なくなってから公表する卑劣。民主党の一方的な主張をそれが争いのない真実であるがごとく報道するマスコミの欺瞞。) また、堀江の「人の心は金で買える」という言葉をあたかも堀江の全人格を象徴するかのように取り上げ非難する。

悪人のように振る舞う「偽悪者」と呼ばれる人がいる。偽悪は偽善の反対語で、偽悪者はうわべだけの善人より悪人と見られた方が心地よいタイプの人間だ。人の心が金で買えるかといえば、社会道徳的には否である。しかし、現実をみると、そのような例が少なくない。国民がバカだということも、歴史をみれば、多くの該当するケースに当たる。かように、現実は単純ではないが、偽悪者は人間の悪の一面に光を当て、自分の視点を鮮明にする。偽悪者は往々にしてナイーブで、人を騙す偽善者になることを恐れ、自分が悪であるとの警告を発し、他人が不用意に近づいて傷つかないように配慮する。

私は、堀江の本を読んだことはないが、時々テレビを見ていて、この人は正直な人だと思った。醜悪な偽善者ばかり登場するテレビの中では堀江の言葉は新鮮だった。

マスコミは今堀江を非難罵倒するが、彼を信じていた者にとって、今回の事件は裏切りではなかったはずだ。金が全てだと言って、法の間隙を突こうとした者が、体制の反撃を受けることは当然予想されたことである。堀江が本物であるかは、彼のこれからの戦いで証明される。

さて、人の心は金で買えると言った堀江であるが、本当は金で買えない心を求めていたのではないか。無一文になった堀江が、金では買えなかった宝物を手に入れるというのは、ちょっとメルヘンチックな話だが、そんなことがあればいいと思う。

この原稿は昨日書いたが、今日の日経朝刊にコラムニストの田勢康弘氏が同旨のことを書いていてビックリした。

2006年4月29日(土) 堀江の出所

堀江貴文が保釈され東京拘置所から戻ってきた。

拘置所前の映像で驚いたのは堀江の人相が全く変わっていたことだった。8キロ減量して精悍に見えたのは勿論だが、目付きが違っていた。以前の傲慢で人を小ばかにした感じではなく、澄んだいい目になっていた。3ヶ月間伸ばした髪と相俟って、ちょっとオーバーに言えば、山にこもって荒修行をした後の大山倍達のようなようだった。大山の修行と言えば、一人で山に登り、自分に課した目標を達成するまで里に下りていかないように、眉を片方ずつ剃っていたというエピソードがある。

3ヶ月間の拘置所生活がそれほど大層なものかという人もいるだろうが、私には（そのような経験がない人間として）想像できないものがあるような気がする。

大山の修行ではないが、我々はどんなに厳しい制約を自分に課しても、逃げ出そうと思えば逃げ出せる。しかし、拘置所や刑務所はそうはいかない。自分の意思では出られない。そこで人は抵抗できない権力の存在を知る。徴兵制のない日本で権力の存在を実感できる場所は他にあまりないのではないか。

もっとも、拘置所や刑務所に入れば人間として鍛えられ、厳しい修行をした武道家のようになれるかといえば、そうではないだろう。むしろ、その反対で、多くの人間は権力に屈し、権力に媚

びて、節操の無い人間になって（又はそんな人間であることを自覚して）戻ってくるのかもしれない。でも、何人かは、圧倒的な力と対峙しても自分を曲げず、自分にとって護るべき価値が何であるを確認して帰ってこられるのではないか。堀江が後者であるかはまだ定かではないが、あの表情を見ていると、いい経験をしたのだろうかと、ちょっとうらやましくなる。自分も若い時に（この歳になってからはいやだけど）そのような体験ができれば少しはマシな人間になっていたかも、と思ったりする。

2007年3月28日(水) 植木等

植木等さんが亡くなった。

植木さんとは一度会ったことがある。「乱」の時で、それについては、映画「乱」製作秘話14章に書いた。たぶんバスの中で2, 3時間は話したはずだが何を話したか覚えていない。映画やテレビで見るとおりの気さくな人だった。

植木さん絡みではもうひとつ思い出がある。中学2年の終わりだったと思う。クラス単位で芝居をすることになった。なぜか私が、脚本・監督で、原水爆禁止の政治劇をやることになった。当時の国際政治を舞台に、実在の政治家を仮面で表現した。その仮面を描いてくれたのは、作家になった橋本治だ。ケネディとフルシチョフが会談をしているところに日本の池田勇人首相からの使者が来て核実験の中止を訴える。私は、役得でケネディをやった。さて、日本の首相からのまじめな訴えに対して両首脳はどう応えるか。突然当時流行っていたスーダラ節のレコードがかかる。そして舞台の上の全員が、植木等の振りで踊りだす。「わかっちゃいるけどやめらねえ～」で幕が下りる。

2007年8月2日(木) 朝青龍騒動と診断書

日本相撲協会は、ケガを理由に夏巡業の休場届を出しながらモンゴルでサッカーに興じていた朝青龍に対し2場所の出場停止と減給の処分を決めた。

休場届の根拠となった診断書は「左ひじ靭帯損傷と疲労骨折で全治6週間」というもので相撲協会はそれを「正当」な診断書だと認めている。診断書が正しければ朝青龍が夏巡業に出ないことは問題に出来ない。つまり相撲協会の認識ではこれは仮病の話ではないのである。

問題となっているのはサッカーの試合に出たことで、その経緯は夕刊フジによればつぎのような

ものだった。

このイベントは中田英寿が提案しモンゴルサッカー協会が協力して実現したものでチャリティーの要素が強かった。観客はサッカー協会が招待した施設の子供たちで朝青龍は観戦だけの予定だった。彼は子供たちの声援に後押しされるように飛び入りで参加してしまった。サッカーをしていたのは中田以外は全くの素人だった。

さて、これをどう評価するか。少なくとも夏巡業をさぼりその間サッカーをして金を稼いでいたという話ではない。医師の診断が過激な運動を控えるようにというものだったら、好ましくない行動とは言えるかもしれない。しかし、横綱の品格を問題にするような話ではない。相撲で100キロ以上の巨漢がぶつかり合うことと比べたら素人相手のサッカーの草試合はものの数ではないとプロである朝青龍が判断したのかもしれない。

本当は痛かったのに出たのならむしろ美談といえる。痛みをこらえて子供たちのためにプレイしたのだから。少なくともモンゴルの人たちはこのように考えるだろう。モンゴルの英雄として期待される行動だったと。

では、本当は仮病だったら誰が悪いのか。相撲協会は朝青龍の申告を信じて巡業不参加を認めたわけではない。あくまで専門家である医師の診断書を信頼したのだ。診断書は「疲労骨折」と言っている以上問診だけで書いたわけではないだろう。それがウソだったら書いた医師は処罰されるべきだ。朝青龍は専門家の判断に従っただけだ。

刑事事件では医師の診断書が大きな意味を持つがどこまで信用できるか疑問だ。人間の運命を左右するかもしれない紙だから医師には責任を持ってもらいたい。

2007年8月10日(金) 朝青龍の記者会見

今朝の「スッキリ!!」でテリー伊藤が、朝青龍に記者会見させることに反対していた。これは、他のコメンテーターの反発を買っていた。私はこれまでワイドショーはみんなで一人を非難するいじめであると言ってきたのでテリーが孤軍奮闘しているのを応援したくなった。何も私が同調できる意見だったからということではなく、大勢に抗して意見を述べていたのがうれしかったのだ。

テリーもあの場では十分説明できなかつたので私なりに補足する。

テリーが前提にしていたのは朝青龍が正常な精神状態にないということだ。これは二人の精神科医がそのように言っているので素人が否定できることではない。では、そのような精神状態の人に記者会見させることに何の意味があるか。素直に思ったことを言えばいいではないかと考える人もいるだろう。しかし、そのとき言ったことに朝青龍は責任をもてないだろう。でも、相撲協会を批判するなり問題発言をすればマスコミはそれをネタに新たな騒動を起こすだろう。それで朝青龍はますます傷つくことになる。

では、素直に謝ればいいではないかという人もいるだろう。しかし、精神状態が不安定な人に謝らせてどんな意味があるのか。謝らせるために記者会見に引っ張り出すのは精神的なリンチでしかない。

2007年8月21日(火) 朝青龍と解離性障害

三人目の精神科医のつけた病名は解離性障害だった。びっくりした。

私は、この日記で何回か「解離性同一性障害」について書いてきた（2004年9月17日、2005年11月14日、2006年7月18日、2007年7月14日）。解離性同一性障害はいわゆる多重人格で解離性障害の一つの類型である。朝青龍は解離性健忘と離人症性障害に該当するようだが、同一性障害を発症することは無いのであろうか。

私に関心を持ってきた事件では、普段おだやかな人が突然凶悪な事件を起こしている。そこには人格の連続性がない。一人の人間の中に複数の人格が潜在していて強いストレスによりその一つが発現するのではないか。そのとき出てくるのは、普段抑圧されている攻撃的な人格が多いようだ。

もし朝青龍の中に、殺人鬼の人格があって、その人格が現在の強いストレスで発現することは考えられないのか。そんなことがあったら、ジュラシックパークのティラノザウルス級の恐怖だ。

黒沢清監督の「地獄の警備員」という映画がある。1992年の作品で、ある商社に警備員として雇われた大男が元相撲取りで、兄弟子と愛人を惨殺したにもかかわらず精神病で無罪になった過去がある。その男が無差別殺人を開始する。ロッカーに隠れた女子社員をロッカーごとつぶして殺すところがすごかった。傑作ホラーだ。

筒井康隆の短編で「走る取的」というのがある。酒場で飲んでいた二人のサラリーマン（一人は空手二段）が取的（下っ端の相撲取り）と目が合ったことから、執拗に追いかける。追い詰められた二人は駅のトイレのわきで惨殺される。相撲が最強の格闘技と信じられていた、曙がK-1

で負ける前の話。でも、サッカーの映像を見ていると、朝青龍だったらどこまでも追いかけてきそう。この小説も傑作。

何れにしても、朝青龍に同一性障害が発症する可能性が少しでもあるなら、早く手を打ったほうがいい。さもないと、とんでもない惨劇が始まる。

2007年8月25日(土) 多重人格

最近多重人格について続けて書いているので調べてみた。と言ってもネットを検索した程度だが。

解離性同一性障害というのが正式な名前。幼児期の虐待、特に性的虐待、が原因となることが多い。複数の人格は、年齢、性別、性格、趣味、経歴、能力が違うのが通常で、国籍が違って外国語を流暢に話す人格が出現することもあるらしい。食事の好みも異なるだけでなく食物アレルギーが特定の人格にだけ存在したりする。

主人格と交代人格に分けられるが、何をもって主人格というのかよく分からない。交代人格が出現するときは主人格は意識が無く、突然時間が経過して買った覚えの無い品が家にあったりする。交代人格が存在することを知らない主人格もいるが、人格間で交流がある場合もある。

多重人格者間に付き合いがある場合、双方の交代人格が入れ替わったという話がある。大林監督の「転校生」のシチュエーションを複雑にした形か。

多重人格の問題は、考えていくと哲学的な問題になっていく。性的同一性障害の場合、女であると意識している人が男の身体を持っている場合、その女であるという意識を尊重するのが最近の傾向である。では、少女の身体に中年男の人格が入っていた場合、どう扱えばいいのだろう。身体に合わせて人格を変えたり消したりするのが正しいのか。人格が交換できるとなると、もっと複雑な問題になる。自意識が移動することになる。

多重人格が存在することについては医学上は完全に認められているようだ。しかし、裁判で多重人格が問題になったことはほとんど無い。宮崎勤事件の精神鑑定書で多重人格への言及があったが採用されなかった。私は最近の異常な事件の多くが多重人格者の犯行ではないかと思っている。しかし、それを認めた場合、多くの人格のうちの一つが犯した犯罪をどうやって処罰するのか。多重人格で無罪になるのだったら皆多重人格を装うことになる。今の医学では、偽装と真性を区別できないだろう。

マスコミも、多重人格のアプローチをとれば説明できる犯罪があってもその方向で追求しない。タブーなのだろう。多重人格を認めていくと今の法体系は崩壊してしまう。刑事だけでなく民事も。別人格がした契約だと言って責任を負わなくてよくなったら契約の意味がなくなる。

我々は今の文明社会は科学に基づいた正しい世界だと信じている。しかし、その確信は魔女狩りをしてきた中世の人々の確信とそれほど変わらないのかもしれない。

2007年10月3日(水) エリカ様

沢尻エリカの主演映画初日舞台あいさつが話題になっている。映像を見たが確かに、無礼な態度だといえる。私はこの女優は「パッチギ！」で観たくらいでありあまり知らない。このようなキャラで売っているようだが、司会の女子アナにガンを飛ばすところなどマジで不機嫌に見えた。

さて、エリカ様とその不機嫌をぶつけた相手が誰かということ、それは司会の女子アナなどではなくマスコミである。マスコミは、世論や大衆を背景に君臨する現代社会最強の権力である。エリカ様は強大な相手にケンカを売ったのだ。

私はそれを好ましいと思った。人間の品格でもっとも大事なものの一つは相手によって態度を変えないということだ。あの舞台あいさつでの態度以上に傲慢な態度はなかなか取れないから、エリカ様は皆に等しく接していると推測できる。

私は、強者には媚びへつらい、弱者には侮蔑的な態度をとるエライ人をたくさん見ているからエリカ様のような個性は安心できる。偽悪者に裏切られることは無いのだ。裏切られるとしても、意外にいい人間だったというようないい再認識になる。

エリカ様はブログに反省文を載せているようだが、どうせプロダクションの人間が書いたものだろう。これからバッシングが続くと思うがめげずに闘ってほしい。

2007年10月6日(土) 沢尻エリカの涙

10月4日の「スーパーモーニング」のインタビューで沢尻エリカが泣いた。

インタビューの冒頭で、沢尻は舞台あいさつの態度について謝罪し、他の話題に移っていった。

しかし、一時間で終了したところで、沢尻の事務所、スターダストがこれでは謝罪の気持ちが伝わらないと異議を述べ休憩の後続行されたとのこと。そして、最後に赤江珠緒アナが「ファンや関係者に伝えたいことがあるか」と聞き、長い沈黙の末沢尻は泣き出した。赤江アナももらい泣きをして、二人は手を取り合ってインタビューは終わった。

2時間のインタビューが20分ほどに短縮されていたので、最初は何が起きたのかわからなかった。多分こんなことだったのだろう。

スターダストは最初から涙での決着をもくろんでいたが、沢尻は抵抗していた。彼女の論理は、あの日の自分の行動は間違っていたが、そのとき感じていた怒りは正当なもので、それは解決されていない。(多分誰か特定の個人に向けられていたものだろう。)泣くのは簡単だが、それでは自分が正しいと信じている部分についても許しを請うことになってしまう。そもそも、あの舞台あいさつにしても、不機嫌なときに作り笑顔で質問に答えるのが誠実なのか疑問だ。素で生きている自分を評価してくれているファンを裏切ることになる。でも、自分を貫いた結果人に迷惑をかけたのだから、これに付き謝るのはやぶさかでない。

赤江も、泣かせればいいという考えには反発を感じていた。だから、簡単に謝罪の言葉を引き出した後は、原因となる事実は追求せず、他の夢のある話題に移っていった。しかし、スターダストだけでなく、テレ朝も視聴率が取れる涙のインタビューを要求した。

だから、最後の10分間には本当の葛藤があった。沢尻は泣くことは自己否定になると思った。泣くぐらい女優だから簡単だ。いや、女だったら誰でもうそ泣きぐらい出来る。でも自分はウソは演技の中だけにして実生活では素で生きている。それを否定したら自分が無くなる。

赤江は、普段の司会を見ていると率直でごまかしが嫌いな人のようだ。だから、泣きを引き出すのが報道の本旨とは思えなかった。でも、視聴率絶対のテレビ局の社員としてはやるしかない。赤江も苦悩していた。

最後の10分間、二人の間には次のような無言の会話があったのではないか。

「これだけ黙っているのに、まだ粘るって、あんたもたいしたもんね!。。。仕方ない、泣いてやるか。でもこの涙は、権力に屈したとか、許しを請うとか言うのじゃないのよ。あなたの根性に敬意を表した涙。きれいに泣くから上手く撮ってね。これ貸し一つよ」

一滴の涙が沢尻の頬をつたって落ちる。

「やった!助かった。。。ありがと。どうなるかと思ったわ。あなたも意外といい子じゃない。

借り一つ、覚えとくわ」

インタビューの録画放映後、赤江は、「沢尻会に入りたい」とまで言って過剰に沢尻を擁護していた。